

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年 5月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人文科学研究所

職 名・学 年 助 教

氏 名 田 中 祐 理 子

助 成 の 種 類	平成24年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成		
研 究 成 果 物 名	科学と表象 —「病原菌」の歴史—		
著者・編著、作成者全員の所属・職 ・ 氏 名	人文科学研究所・助教・田中祐理子		
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配 布 先
	名古屋大学出版会	2013年3月31日	京大人文科学研究所図書室、関連諸学会(書評の依頼)、関連領域研究者への献本、および京大生協書籍部をはじめ一般書店での販売。
データベース等について	公 開 方 法		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。		
会 計 報 告	事業に要した経費総額	2,516,550 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	組版代	1,367,700	1,000,000
	製版代	186,400	
	刷版代	86,600	
	印刷代	195,500	
用紙代	145,350		
製本代	535,000		
合 計	2,516,550	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびの助成に心より感謝申し上げます。今日の学術出版をとりまく厳しい経済的・商業的状況に鑑みるに、助成をいただけなければ、専門性の高い博士論文に基づく単著を刊行することは極めて困難であったと考えられます。学位論文の出版は研究者としての出発点であり、若手研究者にとって貴財団の助成事業は大変に貴重なものであると痛感しております。		

2013年3月31日に『科学と表象―「病原菌」の歴史―』という書名（書名変更手続き済み）で、332ページの単著を名古屋大学出版会より刊行した。本書は、「病原菌」という主題に関する人間の思索と探究の歴史を、主に西洋思想史を舞台に辿るものである。対象を「病原菌の歴史」とすることで、本論は二つの性質の異なる歴史叙述を対照する。すなわち、「病原菌」が細菌及び各種の微生物という具体的事物であることを証明して、一個の科学として確立した「細菌学」の成立プロセスを書く歴史（「科学史」と、「病気の原因」となる「目の見えない存在」についての人間の様々な「想像力」の諸相（「思想史」）との、対照である。

「細菌学」の成立過程は、現代的な自然科学研究の形式が確立し、「科学」と「科学者」の社会的役割が急速に増大する時期と重なる。そのため「細菌学の歴史」は、対象の確実性や言説の科学性の獲得によって、それまででない「実体性」を得ることになる現代科学を分析する題材として適している。一方で「病原性の細菌」の新たな実体性は、「病気の原因」についての様々な「想像力」を、文字通り単なる「想像」として斥けるものでもある。科学史家・科学哲学者のガストン・バシュラールは、このような「科学」の「歴史」を「非合理的なものの敗北の歴史」と呼んだ。今日では、この「非合理的なもの」を単に「障碍」として歴史から排除することは、科学史家によっても批判されている。本論は、「細菌学の確立」という出来事も、「科学の歴史」におけるこのような「勝者」の支配性をはっきりと示す事例であると主張する。

但し、本書は従来の科学史的記述を否定することを目的にするのではなく、また同時に、人間的な表象作用を「客観的事物」の観点から批判するものでもない。この点に関しては、本論は特に、現代の論争的な科学論者ブルーノ・ラトゥールの議論を批判的に検討する。それによって本論は、「科学史的記述」と「思想的記述」を過剰に対立させ、そのために「科学史的問い」と「思想的問い」を共に無化してしまう議論に対して、反論を試みるものでもある。

実際の構成としては、本書は序論において、上記のような目的を今日の科学史・科学論の議論の中に位置づけながら呈示した後、本文は二部構成をとり、第一部では「細菌学」の「前史」として16世紀の医師ジロラモ・フラカストロと17世紀の科学愛好家アントニ・ファン・レーウェンフック、第二部では細菌学確立の立役者として化学者ルイ・パストゥールと医学者ローベルト・コッホについて、その人物像と科学的業績の両面を詳細に論じる。

この4人は、それぞれが細菌学及び微生物学の始祖的な存在として科学史に定着している人物である。本書は、彼らとその科学史的位置付けに帰着する経緯を、まず彼らの個人史、その背景となる社会的・政治的そして学問的な史的条件との関わりに重点を置いて詳述する。このような観点から描かれた場合、従来の科学史的記述によって認めら

れてきた彼らの業績が、実際の彼ら自身の認識とは必ずしも一致していなかったことが確かめられる。しかしその上でなお、彼らが生み出した作品や概念、あるいは技術は、互いに密接に関係しあい、最終的には後世の研究者たちに一個の科学的知識総体を提供するに至る。本書の結論部は、この「総体としての知」を論じるために、特に今日において「歴史」概念が果たしうる役割を提起している。

本書の議論は上記の4人の手になる一次資料を丹念に読むことに基づいている。少なくとも日本国内・欧米において、実際にこの4名の細菌学史上の重要人物の言説を詳細に読み込んだ上で、並置・比較した研究は存在しない。また、彼らの言説を、対象となった事物と彼らの認識及びその認識論的諸条件との関係、そして彼らの記述あるいは画像的呈示技術の効果に特に着目して論じたことは、近年盛んになりつつある「科学における表象」に着目した科学論の一端を担うものとなると考えられる。